

5) エンドセリンと低ナトリウム血症

鴨井 久司 (長岡赤十字病院
内科)
田村 哲郎 (新潟大学脳外科)
山路 徹 (東京大学第三内科)

6) 最近経験した Cushing 症候群及び無症候性 Cushing 症候群

村竹 辰之・津田 晶子
浜 齊 (木戸病院内科)

典型的な Cushing 症候群 (症例1) と無症候性 Cushing 症候群 (症例2) の2例を報告した。共通点として、血中コルチゾールの日内変動の消失、血中 ACTH の抑制、デキサメサゾン抑制試験にて 8mg 投与にても抑制されないこと、副腎シンチでの患側の取り込み亢進と健側の取り込み抑制が認められた。

しかし、インスリン負荷試験での ACTH とコルチゾールの反応、尿中ステロイドホルモンのレベル、耐糖能、術後ステロイドホルモンの補充療法の期間に明らかな相違がみられ、症例1の重篤さが窺われた。

最近、副腎偶発腫瘍の内分泌学的検討で、症例2のようにコルチゾールの自律性分泌が示唆される一方、コルチゾール分泌は正常範囲内にあり、Cushing 症候群の症状が発現しない症例が報告されている。現在のところ、このような症例が将来的に Cushing 症候群に移行するか否かは不明であり今後の検討が待たれる。

7) 新潟大学泌尿器科における過去10年間の副腎腫瘍患者の臨床的検討

車田 茂徳・武田 正之
西山 勉・高橋 等
郷 秀人・片山 靖士
谷川 俊貴・佐藤昭太郎 (新潟大学泌尿器科)
狩野 健一 (国立村松病院)

新潟大学泌尿器科において過去10年間に45例の副腎腫瘍患者に対して治療を行った。組織型別内訳は褐色細胞腫19例、原発性アルドステロン症12例、クッシング症候群10例、非機能性腺腫2例、副腎皮質癌2例であった。副腎腫瘍の局在診断における各種画像診断の有用性について検討した。新しい診断法である MRI の有用性が確認されたと同時に今後解決されるべき点もいくつか確認された。

8) 二次性副腎皮質機能不全を伴った下垂体腺腫の臨床的検討

田村 哲郎・黒木 瑞雄 (新潟大学脳研究所)
田中 隆一 (脳神経外科)

下垂体腺腫による視力視野障害は手術後多くは改善するが、前葉機能低下の回復は困難である。今回我々は二次性副腎皮質機能不全を伴う下垂体腺腫に対し臨床的に検討を行ったので報告する。'78.1~'91.7 に経験した下垂体腺腫は285例である。重症下垂体卒中4例と Cushing 病18例を除く263例中19例 (7.2%) が二次性副腎皮質機能不全を呈した。年齢は20~73 (平均50.5) 才。非機能性腺腫 15/89 (16.9%, 男 12/51: 23.5% 女 3/38: 7.9%), PRL 産生腺腫 4/103 (3.9%, 男 3/18: 16.7% 女 1/85: 1.2%) で、その他の腺腫にはなかった。鞍上進展 (一) 例ではなかったが、鞍上槽まで進展例 6/71 (8.5%), 第3脳室底まで進展例 11/67 (16.4%), モンロー孔まで到達例 2/15 (13.3%) であり、視障害のなかった例が6例あった。また下垂体機能不全症状が受診の契機となった者が8例であった。全例手術したが、機能は回復しなかった。以上より無症状でも鞍上進展した下垂体腺腫は予防的に加療すべきと思われる。

9) 微量の CB154 が著効を示したクッシング病の1例

金子 兼三 (長岡赤十字病院内科)

症例は23才、女、第52回の本会で報告した症例の続報である。発病は18才頃で典型的なクッシング徴候を呈し、'88.11.12 入院した。病型診断で① ACTH は同一検体の大塚アッセイ測定では 10 pg/ml 以下、三菱油化測定では 46~100pg/ml と異なる値を示し、L-8-V 試験、CRF 試験で無反応、② SU 試験：軽度上昇反応、③ Dexa (8 mg/日、2日間) 抑制試験：抑制 (-)、④ 副腎シンチ：両側に集積像 (+)、⑤ 下垂体 CT：腫瘍像 (-) を示し、自律性の強い ACTH 産生下垂体微小腺腫も考えられたが、原発性副腎皮質過形成を考へて、'89.1.9 左副腎を全摘出した。組織像は球状層の単純過形成であった。術後約1年間は ACTH (大塚アッセイ) 10 pg/ml 以下、血中F、尿 17 OHCS は正常域であったが、'90.1 より再上昇。'90.4 より Trilostane 120~180 mg/日投与したが、ACTH、血中F、尿 17 OHCS がさらに上昇したため '91.4.13 再入院した。下垂体 MRI：腫瘍像 (-) のため、5.7 よ